

アンドリュー・ワイエス 記憶を引き出すマジック

丸沼芸術の森 美術鑑賞会

講師 中村音代

2006年5月27日

文責 美術散歩管理人 とら

<はじめに>

現在フィラデルフィア美術館でアンドリュー・ワイエスの回顧展が開かれている(2006.3.24-7.16)。そのテーマは Memory and Magic であったが、今回の第6回「丸沼の森 アンドリュー・ワイエス展」のテーマもそれにちなんでいる。ワイエスは、夏はメイン州クッシング、冬はペンシルヴェニア州チャッツ・フォードを生活の拠点 to しているが、今回は丸沼に所蔵されているクッシングのオルソン・ハウス・シリーズの一部を展示している。ワイエスのテンペラ画は少なく、ビル・ゲイツですら一点しか所蔵していない。したがって本展では主としてテンペラ画の習作としての素描画や水彩画を展示しているが、水彩画の中にはほとんど本画といえるものもある。

1. **ワイエスのプロフィール**・・・1917年7月生れで、現在88歳でもうすぐ89歳である。最近はずいぶん衰えが目立ち、フィラデルフィアの回顧展にも車椅子で出席したとのことである。ワイエス22歳の1939年、自分の水彩画を見てもらうためクッシングのジェームス氏を訪れたところ、当人は不在で、出迎えたのは17歳の娘ベッツィだった。そしてベッツィは避暑に来ている際に、卵、ミルク、ブルーベリーなどを買いに行っていて仲良くなっていたオルソン家のクリスティーナをワイエスに紹介したのだという。ワイエスとベッツィの2人は翌年結婚する。クリスティーナは3歳ごろから歩行困難となっており、手の指も変形していたという。病因はポリオであるともいわれたことがあるが、現在ではリウマチであったと考えられている。貧困の中にも気品が高く、魂の交換ができるほどの精神性を有するオルソン家のクリスティーナと弟のアルヴァロに共感して、その後30年間生活をともにした。クリスティーナは、炊事くらいはできたようであるが、足が悪いため弟とともに1階で暮らし、ワイエスが2階と3階を使っていた。
2. **絵を描き始めたきっかけ 父 N.C.ワイエスの影響**・・・父は有名なイラストレーターであり、ワイエスの絵画技術を指導した。彼には芸術至上主義を貫くことができるだけの経済的余裕もあった。しかし一方、父に対してはオディプス・コンプレックスを有しており、1945年に父が死亡してからはじめて絵描きとして一本立ちになったという面がある。
3. **「記憶を引き出して描く」ということ**・・・ワイエスは、物をそのまま描くのではなく、自分がその物の本質から感じられるものを観る人に伝えるように描くといっている。そのためには描

きたい対象の本質を一旦記憶に止め、これを想起しながら描くという「記憶を引き出して描く」方法を使っている。

4. **影響を受けた画家たち**・・・ワイエスの素描はデューラーの影響を受けている。またドライブラッシュの技術もデューラーの作品に学んでいる。これはデューラーの《野兎》を見れば明らかである。
5. **技法について**・・・1)素描、2)水彩、3)ドライブラッシュ、4)テンペラが主なものであるが、その詳細についてはかなり以前のインタビューで話した以外あまり明らかになっていない。彼はフェンシングを得意としていただけあって、鉛筆で描くのが早く、途中で鉛筆が折れることも少なくなかったが、その場合でも折れた鉛筆を使って描き進んだという。先に述べたドライブラッシュとは水分を絞った筆で水彩絵具を使って描く技法である。テンペラは卵黄と酢に絵具を混ぜて描く技法で、ポッチチェルリの昔からあって、画としては長持ちするが、描くのに時間がかかり、疲れるため1年に2枚ぐらいしか描かなかった。孫に聞いた話だが、ワイエスは赤い卵は使わなかったとのことである。

<おわりに>

「オルソン・ハウス・シリーズ」はワイエス家 線維会社経営者 映画会社経営者 日本人 日本人 アメリカ人 日本と動き、いったん須崎氏へ購入打診があったが高かったのであきらめていた所 2年後に再打診があり、半額になったので丸沼へ入った。最近、愛知県立美術館にワイエスのテンペラが入ったが、これはここには日本を代表するワイエス研究家の高橋秀治氏がおられるからで、ワイエスが自分の作品は自分の国よりも日本で理解されていると考えていることとベッツィ夫人を代理としてそろそろ身の回りの整理をはじめておられることと関係があるのではないかと思う。

<展示品の説明>

《オルソンの家》の階段の踊り場にはスペースがあるが、これはクリスティーナの場所である。階段の一部が精密に書かれた習作が《クリスティーナの世界・習作》の裏面に描かれている。オルソン家は200年にわたって作られてきた堅牢な家で、ゴシック的あるいはメディチ家的であり、ワイエスはその屋根はクリスティーナの鼻に似ているといっている。

《クリスティーナの世界》の習作に見られるように、彼女はその辺を這って移動していたようである。長時間モデルを務められなかったので、一部は夫人が代行している。

《海からの風》のテンペラは日本にきたときに「ワイエスのカーテン」として有名になった。クリスティーナの曾祖父は魔女裁判官の地位にあった名家であり、この鳥の刺繍のある豪華なカ

ーテンもオルソン家に古く伝わったものであるが、これが風にたなびく様はオルソン家が滅びていくことを象徴している。事実弟のアルヴァロも骨の悪性腫瘍に侵されていた。

この画には 100 枚もの習作がある。最初は今回展示してあるよう習作に見られるように、クリスティーナと海からの風を重ねて描いていたが、最後には〈海からの風〉と〈クリスティーナ〉の二つの完成作が作られた。後者はビル・ゲイツの所有となっている。

〈オイルランプ〉・・・クリスティーナの弟アルヴァロは控えめな性格で、既に有名になっていたクリスティーナをたててほとんどモデルにならなかったが、この〈オイルランプ〉はその例外である。

〈アンナ・クリスティーナ〉習作・・・晩年のクリスティーナの深い精神性を表している。顔だけでも十分なのであるが、優れた質感の椅子も書き入れている。

〈オルソンの納屋の内部〉〈アルヴァロの馬〉・・・これらの水彩は本画である。白の表現は画用紙を残す方法をとっており、白絵具は使っていない。紙はイタリアのパプリアーノのことである。レンブラントの光と影を髣髴とさせる。

〈卵の計量器〉〈青い計量器〉・・・余白の美が明らかである。はじめはアルヴァロを描き込む積りだったようであるが、描きこまなくてもそのスペースが彼の存在を意識させる。これらの 2 枚は水彩ではあるが本画である。青という色を巧みに使っているが、ワイエスは青をみると気持ちが高揚すると述べている。

〈幽霊〉・・・Revenant の翻訳で、幽霊というタイトルが正確かどうかわからない。自画像のようでもあるが、予期せず急に有名になって自分の存在感を失ったワイエスが黄泉の世界から立ち上がってきた人物として描かれている。

〈ワイエスの家〉・・・羽目板の数まで正確に描かれている。

<おまけ ヘルガのこと>

ドイツ系看護婦エルガとのことは 17 年間も秘密にされており、彼女の裸体を描いた「ヘルガ・シリーズ」240 点は 15 億で売れたという。現在、ワイエス、ベッツィ、ヘルガはともに暮しているようである。先ごろのフィラデルフィア美術館での回顧展の正式なパーティに、ヘルガはフリルのついた白の派手なロングドレスで現れ、出席者の矚目を買ったとのことである。